

ヤスクニ・レポ 296

「暴力の世界で柔和に生きる」を読んで

Living Gently in a VIOLENT WORLD

スタンリー・ハワーワス、ジャン・バニエ著

月村順一(船橋聖書バプテスト教会員)

和解をめぐる神学者と活動家との対話がとても良い内容でした。特にウクライナ戦争が起こり、その終焉も見ないうちにガザへの無差別な攻撃が起こり今や、民族浄化の殺戮が繰り返されている状況では和解をめぐる神学者と社会福祉活動家との対話など何ももたらさないようにも思えます。

ジャン・バニエはカナダ出身、1929年生まれ13歳で海軍入隊、1950年海軍除隊。海軍での目覚ましい活躍ぶり、そしてカトリック教徒です。有能で学識があり大学哲学教授の資格を持って(自分ではアリストテレスのことを少し知っているだけと言っている)いて、その前途は洋々に開けているようでした。でも、自分が愛されていることが分からなかったと言います。もし病気になったとき、本当にそばにいてくれる人がいるのか、受け入れられて称賛されたいとの思いがあったことは認めています。そのまま、ありのままの自分を愛し

てくれる神様と出会い、同じように何も持っていない人に目を向けます。障がい者の異形のあり方はキリストの受難を表している。彼は神秘をそこに感じ取っています。その彼が神に導かれて最も疎んじられている人たちのことを思うようになったのです。人から称賛されたいからではありません。この出会いからシェルター「バニエ」を開始します。そして、障害者と向き合います。疎外されて人がいるのに人に見えないわたしたち(様々な理由、今重要な働きをしている忙しい)と同様、彼も向き合っていませんでした。障害者はそのないがしろにされた怒りを爆発させて、悪態と破壊を投げつけます。彼は閉ざされた心を無視しないで対話を続けます。それで今では障がい者と話している方が「ふつう」の人と話しているよりより砕けた素の自分でいられるようになりました、と語ります。飾ることもけん制することも何もないからです。

彼はその活動の中で領域を広げていきます。

まず、プロテスタントとのエキュメニカルな交流をし、正教も加わり、キリスト教の福音がもたらす力を確信します。その輪はイスラム教、ヒンズー教とも交流し「バニエ」を広めます。彼は出し惜しみをせず。経済的、社会的(地位や学歴、性別による)差別され、見失われている人びとを何とかしたいと思う人たちと協力します。奉仕者を派遣し、文字通り学びと訓練を終えた人々を遣わし、その土地の人たちと協力して生きる場所を創設します。ニューヨークからバンガロールまでヒンズー教徒の信じる像まで受け入れます。(その像はのちに持ち込んだ人の手でなくなります)。ハワーワスはプロテスタントの神学者で宗教改革の伝統に立つ立場です。「タイム誌」によって 2001 年アメリカ最高の神学者に選ばれました。が、この目覚ましいジャンの活動に魅了されています。ハワーワス

の神学的立場は合同メソジストにあるようですがカルビニズムも、新正統主義も当然のことながら熟知しています。それで彼の言説は権威的で他者の批判をはねのける強さがあります。世界のどんなトラブルも聖書の真理に基づいて理解することができ、そうである以上、解決の道も展開される。こういう明快な確信はまだ戦争の影におびえ、さらなる試練と破壊が世界を凌駕し、キリスト教会が独善的に宣教するだけでは己が価値観の押し付けにしか受け取られかねません。反対に戦争推進勢力とみられる巨大軍需産業もキリスト者であり、第3次世界大戦の推進役にはならないように見張っていなければいけないと思わされました。巨大すぎる世界の動きですし、小さい存在にすぎませんが、祈りつつ心に平安をいただきながら地の塩、世の光でありたいと思っております。

### 2024 年 11 月 15 日奨励 「礼拝をささげたあとも」 詩篇 133 須田毅師 (JECA・西堀キリスト福音牧師)

「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんといいあわせ、なんといいのしさであろう」という御言葉は、教会にあって仲間と共に神さまを礼拝することを、真っすぐに表現しています。教会に生きる喜びは、本来的には神から祝福を受けていることを源とします。神のみ教えに生かされて、主イエスの救いを幾重にも感謝して生きる力は、礼拝生活を中心にして与えられるものだと、私たちは実際の経験も伴って、確かなものとされていると思います。

この詩篇についてある注解者は、この詩は都上りをもってエルサレム神殿での礼拝をささげ、その帰り道に歌われたものの可能性もあると言います。ヘルモン山は、イスラエルの北の端近くに位置する山です。エルサレム詣でから帰って、自分

の生活する村でヘルモン山を見上げて、神の祝福が露のように、繰り返し、広い地域に下って来るのだ、とほのかな温かみを覚えるように、神に感謝している姿として、理解することもできます。

その意味では、神礼拝の喜びは、礼拝の帰り道や帰った後の生活の中で、変わらずに神からの祝福にあずかっていることと共に、消えることが無いはずで、キリスト者の礼拝者としての務めは、この社会に対しても、神の祝福が与えられていることを蔑ろにしないように、気づかせ証しする務めもあります。都上りの後の、礼拝者として与えられている恵みを、証ししたいと促される思いがします。